

木曾川



長野県上松町

ふるさとの街・探訪記

水と緑が癒す郷・上松町

エリア・リポート

中央アルプスから木曾川に注ぐ滑川

赤沢自然休養林の成り立ちと現在

気ままにJOURNEY

文人や歌人が愛した
中山道上松宿を歩く。

歴史ドキュメント

デ・レーケの木曾三川調査と
「木曾川下流概説書」

TALK&TALK

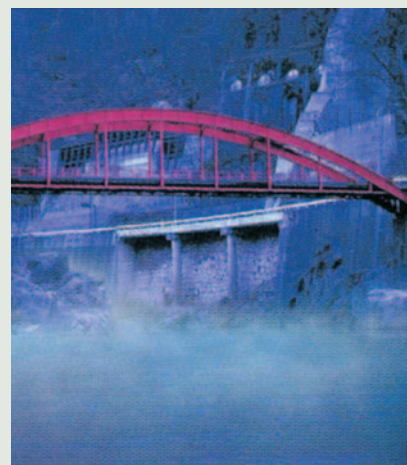
治水共同社と明治官僚の気概

民話の小箱

小川入の姫瀧悲話

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。

春号は、駒ヶ岳の山麓に広がる信州木曾あげまつから、
その歴史や滑川、赤沢自然休養林の変遷を中心に、
歴史ドキュメントでは、
「明治改修」シリーズの第2編をお届けします。



国土交通省中部地方整備局
木曾川下流河川事務所



水と緑が癒す郷・上松町

駒ヶ岳西麓の町、上松



上松町は木曽谷のほぼ中央部に位置し、木曽川をはさんで東西に広がる町です。東は中央アルプス木曽駒ヶ岳を頂点とし、そこを水源とする激流・滑川と十王沢が、西は小川入国有林を水源とする清流・小川が木曽川に合流し、その地形は蝶が羽を左右に広げたような形をしています。

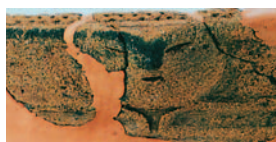
木曽川に沿って、国道一九号とJR中央本線が縦断し、上松・倉本の二駅があります。

町の約九割が山林で、その大半が国有林です。集落は木曽川沿いの段丘地帯と、駒ヶ岳山麓の十王沢・中沢、滑川沿いの東里、小川沿いの西里の二三地区に点在しています。

遺跡に見る太古の暮らし

長野県は「縄文王国」と呼ばれるほど、大きな遺跡と多量の見事な土器が発掘されています。山や川に近いという地形条件が、狩や漁、そして木の実や野草の採集に適していたのでしょう。現在のところ、上松町内で発掘され

た遺跡は、約九〇で旧石器時代から奈良時代にまたがり、最も多く見られるのが縄文時代の遺跡です。中でも、縄文前期・中期の遺跡が多く、吉野遺跡には一〇軒前後の家があり、当時としては木曽谷最大のムラでした。吉野出土の御物石器は精巧な完成品で、北陸文化圏の東端を示す石器として、町文化財に指定されています。



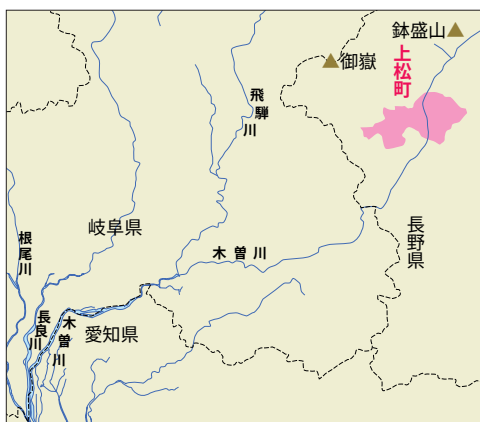
吉野遺跡から出土した縄文中期の人面

吉蘇路の開発

木曽地方が歴史書に初めて記されたのは、八世紀初頭の「続日本紀」です。大宝二年(七〇二)の記事には「始めて美濃岐曾山道を開く」と書かれ、和銅六年(七二三)の記事には「吉蘇路」とあり、古くは、「岐蘇」「吉蘇」「岐曾」と呼ばれていたようです。

この吉蘇路は、中央政府が美濃と信濃国府を結ぶ最短道路として開通させた官道です。吉蘇路開削は美濃国あげ

いくつもの山ひだに開かれ、木曽川沿いに開かれた上松町。古くは木曽路が整備され、木曽氏一族が居館を構えました。近世になると中山道、木曽一宿の宿駅として栄え、尾張藩の厳格な森林保護のもと、木曽木材の中心地として発展を遂げました。明治になると中央本線などが整備され、現在は、地域活性化を目指して多彩なプロジェクトが実施されています。



ての大事事で、多くの農民が徴用されて工事に関わり、その一部の人々が木曽郡の南部に住むようになり、ムラができました。上松町にある奈良時代の遺跡は、その集落跡と考えられています。しかしこの集落も、吉蘇路開削時だけのものだったようで、その後九世紀前半にいたるまでの住居跡は発見されていません。吉蘇路のような国挙げての大事事も、それを維持管理できるだけの人を定住させることができず、結局は廃道となり、木曽の開発にはいた

らなかったようです。

景勝地として名を馳せた木曽古道

平安時代、信濃国や東濃地方から木曾谷へ人々の移住が進み、木曾谷が開発されるようになると、木曾谷は中部高地を縦断する交易ルートとなり、さびれていた吉蘇路は木曽路として復活し、多くの人や物資が往来するようになりました。

木曽路は、現在の国道一九号やJ R中央線と同じ、木曽川左岸を通っていたようです。峻険な山や切り立った谷を考えると、木曽川左岸がルートとして最も適していたのでしょうか。とはいえ、左岸にも難所がいくつもありましたが、一つは山が木曽川に迫っているところであり、二つ目は、滑川をはじめとした支流を渡るところ。豪雨により氾濫を引き起こすと通行不能になってしまうからです。



上松町空撮

こうした難所を避けるために開かれたのが「木曽古道」です。図に見るように、川の上流や山裾を通る木曽路の枝道が「木曽古道」と



木曽路と木曽古道



木曽古道

して設けられました。上松町を通る木曽古道は大桑村を北上し、池の尻から山裾に入り、大沢川、棧沢川、さらに萩原沢川と渡って東野集落に出て、その後滑川を渡って木曾福島を目指すというルートです。

このルートはいくつもの沢を渡るため、急坂を上がったり下ったりしなければならず、棧沢川では鉄鎖が必要だったようです。この棧沢が、現在、木曾八景の一つに選ばれている「木曾の棧」だったという説もあります。また、平安時代末期に成立した「今昔物語集」には、信濃国守が棧から落ちてキノコを採ったという話があり、その棧が棧沢ではないかという説もあります。



木曾の棧

このように木曽路や木曽古道を利用した都人が、都へ帰って木曾での見聞を語る中で、木曾は景勝地として知られるようになり、平安時代

の歌人は各地の景勝地を枕詞にして訪れたこともない土地を和歌に詠んでいます。木曾もまた木曽路やかけはしなどが、歌枕に使われるようになりました。

木曾氏の支配

「木曾」の語源には諸説があるようですが、源平盛衰記(一二四九)は「木曾」と書いています。また文人墨客は木曾の山道が険阻であったので、「岐阻」と当て字をしていたようです。いずれにしても現在通用している「木曾」は源平時代から使われたらしく、木曾義仲も「木曾」という姓を名のついています。

室町時代から戦国時代にかけて、木曾義仲の子孫と言われている木曾氏が木曾谷一帯を支配し、木曾氏の流れを汲む上松氏が、上松町に居館を構えました。



玉林院

一三代木曾豊方の次男家信は、上松氏の祖といわれる人物です。一六代義元の次男玉林は、天正七年(一五七九)上松に玉林院を建立しました。一八代義康の次男義豊は、上松藏人を名乗り、館は玉林院裏の天神山に構えました。蔵人が生きた戦国時代を反映してか、彼の生涯はまさに数奇なものでした。織田家や徳

川家康の人質になったあげく、甥の二代当主義利に殺害されました。この時期、上松町内には、棧城、上松城、萩原城、櫛ヶ上城、立松城、天神山館などの居館が築かれました。

一方木曾氏は、応永七年(一四〇〇)、上松の倉本から福島まで木曽川沿いに道路を開き、この時、沓掛に波計棧道(はばかりさんどう)を架けました。天文二年(一五三三)には木曾義在が木曾谷の道路を整備して宿駅を定め、その時、上松も宿駅の一つに決まったようです。また、通信手段の一つとして用いられた木曾氏の「のろし台」が置かれていた山は、今も台ヶ峰と呼ばれています。このように木曾谷に勢力を伸ばした木曾氏と上松氏ですが、徳川家康に所領を没収され、滅亡しました。

中山道上松宿と木曾の棧

関ヶ原合戦(一六〇〇)の後、木曾衆の一族である山村氏は木曾代官として、木曾の山林、河川の支配を任せられました。その後、木曾や上松が尾張藩に編入されると、山村氏は尾張藩の木曾代官に任命されました。

江戸幕府が成立すると、中山道が整備されました。上松宿はもとも他の木曾の宿駅と同時に天文年間(一五六〇)に設けられましたが、慶長六年(一六〇一)にいたって、中山道の宿駅として指定されました。中山道六九次の中でも、木曾谷は山道が圧倒的に多く、北は豊川か



木曽の棧

ら南の馬籠までが木曾一宿と呼ばれ、中山道を別名木曽街道と言わしめた風光明媚な街道でした。

中山道の名勝として有名な木曽の棧は、波計棧道とも呼ばれており、前述したように木曽氏の時代に整備されてい



寝覚の床

丸太などで横に張り出すような構造で、足を踏み外せば直下の川へ転落する恐れもあるため、中山道でも有数の難所と言われていました。

こうした構造を持つ箇所を、上松町一帯では棧と呼んでおり、現在、棧という地名が残っているのは、前述した木曾古道筋にある棧沢と、波計棧道という別名を持つ中山道の棧です。

木曽八景の一つに数えられる木曽のかげはしは、棧沢だとも中山道の棧とも言われていますが、後者の説が有力で、現在、県史跡に指定されています。

中山道の棧は、正保四年（一六四七）、通行人の松明の不始末で焼失、慶安元年（二六四八）、中央部を木の橋とし、両側に石垣を築くという半永久的な工事を行いました。さらに寛保元年（一七四一）に中央の木橋部分も石垣とし

て改修しました。現在、この棧を対岸から見ると、木曽川に面した岩盤の上の石垣が昔のままで詰れており、往時を偲ぶことができます。



現在の木曽棧跡

木曽材木役所と資源保護

木曽の豊富な木材は、早くから幕府の注目するところでしたが、元和元年（二六一五）に幕府御用材にも供するとの条件付きで尾張藩主徳川義直に与えられました。中でも松は建築材として需要が多く、尾張藩の木曾山からの収入の大部分は、この松によってもたらされています。戦国時代に焼失した城郭や江戸、駿府、名古屋などの都市の整備にも大きく寄与していました。このため、木曽の山林は荒廃の危機を招き、寛文五年（二六六五）、尾張藩は林政改革に乗り出し、山村氏から木曾山の管理・支配権を取り上げました。そして同年、上松の原畑に藩直属の材木役所を設置し、それ以来明治初年まで、木曾山を支配し、伐木・運材川並取締りを行い、資源保護に努めました。

三村が合併し、上松町が誕生

明治七年（一八七四）、上松村は萩原村と合併し、駒ヶ岳の麓にある村として駒ヶ根村と称しましたが、明治一四年（二八八二）になって再び分村し、上



町制施行(大正11年)

期の好景気時代に再び隆盛となりましたが、昭和四年（一九二九）の生糸価格大暴落による負債と火災により、次々と廃業してしまいました。

着々と進む交通網の整備

交通網の整備としては、明治一三年の明治天皇の木曾巡幸に合わせて中山道の改修が行われ、明治四三年（一九一〇）に中央線上松駅ができ、翌年には中央西線が開通しました。

大正五年（一九一六）には森林鉄道が開通し、上松駅に基地が作られました。こうして上松は木材の一大集散地として発展を遂げますが、その一方、加

工地でもある上松は度重なる火災が発生。昭和二五年の大火災を契機に都市計画を策定し、新しい町づくりを始めることになりました。途中、昭和三四年の伊勢湾台風による水害が発生します

が、好景気とともに徐々に整備も進みました。

さらなる発展を目指して

平成に入る健康・福祉関連の整備が進められるようになり、また平成一〇年には上松バイパスが完成

国道一九号における交通面での弊害が解消したことで、上松町への観光客が増加するようになりました。そのほか、魅力あるまちづくりとして地域活性化におけるプロジェクトも進められており、観光客に地元の産物や味覚を味わってもらうため、平成二二年販売交流施設「よろまいか」が完成。平成二二年には特産商品開発センターも開設し、地元ならではの素材を使用した商品開発も行われています。



販売交流施設・よろまいか

現在、「世界に誇る木曽檜」と緑が癒す郷信州木曽上松町をキャッチフレーズに町の財産である豊かな森林資源を守り、環境への配慮と観光の充実を図り、さらなる発展を目指しています。

参考文献

- 『上松町誌』歴史編 民俗編 平成一八年 上松町
- 『木曽の上松』編集委員会 昭和四九年
- 『上松町制80周年記念誌』平成一四年 上松町
- 『角川地名大辞典 長野県』角川書店
- 『長野県の地名』平凡社

AREA REPORT

長野県上松町

中央アルプスから 木曽川に注ぐ滑川

滑川は豪雨の度に土石流を起こすことから暴れ川とも呼ばれていました。江戸時代には中山道のルートとして滑川橋が架けられ、原畑用水の水源にも利用されました。明治になるとヨハネス・レーケが木曽山を現地調査し、砂防の必要性を強調。平成元年に東洋一の規模を誇る滑川砂防堰堤が完成し、現在は滑川砂防自然公園など着々と整備が進められています。

木曽駒ヶ岳と滑川

木曽川上流部の水源地帯は、わが国有数の高山地帯で、流域の大部分は急峻な地形で形成されています。

木曽川左岸側には、中央アルプスが連なり、山脈のやや北寄りに位置する標高二九五六mの主峰木曽駒ヶ岳は、二五〇〇m以上の高峰十座をはじめ、俗に三六峰八千溪といわれる峰や谷を



木曽駒ヶ岳

したがえて
います。

中央アルプスから流下する川は急流で、風化しやすい花崗岩地帯を貫いて流

れ下るので、時には豪雨による大土石流に変わり、人家や国道、鉄道線路への被害という災害の原因となっています。

特に木曽駒ヶ岳に源を発する滑川は、中央アルプスの木曽川支流の中で屈指の急流といわれています。流路延長一二km、流路面積は二六、二m²。暴れ川とも呼ばれるように、その昔から土石流の多発地帯でした。川床には、巨石がごろごろと転がっており、土石流の脅威を見せています。

駒ヶ岳登山道と滑川

駒ヶ岳信仰が盛んになったのは、一四世紀ごろ。山麓の徳原には里宮とし

て駒ヶ岳神社が祀られています。

駒ヶ岳登山コースはいくつもありますが、上松を出発するコースは、敬神の滝を基点とするコースと芦島高原をすするコースがありました。このなかでも敬神の滝コースは、滑川を北上するルート。徳原の駒ヶ岳神社を出発後、滑川を渡り、河原沿いに北上して敬神の滝で行った後、山頂を目指すルートでした。この道は上松の人々の生活の道であり、農家の人たちが馬に食べさせる青草を山に刈りに行ったり、燃



駒ヶ岳上松口登山コース

料の薪を拾いに行ったりする道でもありました。

W・ウェストンも、木曽駒ヶ岳の登頂の際、この滑川に沿って北上したことを、日本アルプスの名を広めた著書「日本アルプスの登山と探検」の中で述べています。

滑川橋とその構造

上松の地形は山地が連なり川も多く複雑な地形であるため、集落と集落とを結ぶ道路にはたくさんの橋が架けられていました。

滑川橋は、はなかけ橋とも呼ばれ、特色のある構造となっていました。

文化二年(一八〇五)に刊行された「木曽路名所図会」には、「なめ川橋・木曽川にわたす。長さ二五間、南北より刎ね木にて、中に橋杭なし。この辺特に急流なり」とあります。このあたりが急流のため橋げたが流されることから、支柱を建てず兩岸から刎ね木を出して橋を支えるように造られたようです。滑川は雨期になると水量が増して水の勢



滑川



旧国道に架かる大正期の滑川橋



旧国道に架かる昭和20年代の滑川橋

いがいつもより強くなり、谷の深い寝覚地区では川の中に橋脚も造れず、このような特殊の工法の橋が工夫されたものと思われま。

江戸時代から明治・大正・昭和までの形態を保ってきた滑川橋に、先人の智慧の深さを感じることができます。

原畑用水の開削

滑川を水源とするのが原畑用水です。嘉永年間（一八四九）、上松の名主・塚本与惣兵衛は、原畑地区の開田を目的として、滑川を水源に原畑までの用水開削を計画しましたが、決壊等の恐れから反対に遭い、材木役所の防火用水ということでやっと説得することができました。

「木曾二一宿火災年表」によれば、上松宿は江戸期に七回の火災が記録されており、中でも延享三年（一七四六）の大火は、宿内を全焼させています。狭い谷筋の強風が吹く街道沿いに、板壁・板屋根が立ち並ぶ上松宿では、ひとたび出火となるとたちまち延焼は広がっ

てしまったのでしよう。

原畑用水の目的は新田開発でしたが、木曾材木奉行所の防火用水ということで、尾張藩の権威をもって反対の声を抑え、工事に着手できたのでしよう。困難を極めた水路延長約三キロの大工事は、約六年間に及びました。用水は町部、見帰、寝覚各地区に上水道ができる昭和三年（一九五八）まで飲用水や防火用水に利用され、現在もお、各方面で使用されています。

ヨハネス・デ・レーケと滑川調査

日本砂防の父といわれるオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケは「木曾川下流の概説書」で、水害の原因として「障害ヲ来スノ最モ甚敷ハ木曾川流出ノ土砂ナリ」と指摘しています。そして「木曾川の節度対策」において、木曾川の流送土砂を止めることに着手しなければならぬと提言しました。

上流山地の砂防の必要性を力説したデ・レーケは、明治一三年（一八八〇）七月三日から八月二日までの半月間、木曾川上流山地（奈良井・岐阜の現地調査を実施しました。同行した佐田正一内務六等属の出張日記にこの時の子細が書かれています。八月二日と三日、上松町には二泊し、二日に滑川沿いのルートで駒ヶ岳に登り木曾谷を眺望。滑川が常に土砂を流出させている様子を目の当たりにしたデ・レーケは、崩落箇所の下流に堰堤を造ること

を提起しました。三日には小川上流の姫宮官林で皇居建材伐採状況を視察しています。

滑川砂防事業と現在の砂防公園



滑川第一砂防堰堤

滑川をはじめとする木曾山脈に水源を持つ支流は土石流を多発していました。このため昭和五三年（一九七八）より、国の直轄工事として滑川砂防工事を着工。平成元年には、東洋一の規模を誇る滑川第一砂防堰堤が完成しました。

堰堤完成の三ヵ月後、七月九日朝から翌朝まで二〇〇㎜を超える集中豪雨で北股沢に土石流が発生しましたが、この土砂を滑川第一砂防堰堤が堰き止めました。完成前にこの豪雨が襲っていたら下流に大被害をもたらしたと推定され、早速堰堤の効果を実証されました。

滑川第一砂防堰堤



きそひのきの里トライアル

の周辺は、滑川の自然や楽しんでもらおうと滑川砂防公園として整備され、それに先立つ平成二年から、河床を生かしてのバイクトライアル大会を実施しています。この大会は「きそひのき里トライアル」としてすっかり定着し、毎年夏には全国から参加者が集い、戦績をめぐって熱いレースが繰り広げられます。また、平成一〇年には、日蘭修好四〇〇年を記念したイベントが開催され、デ・レーケのレリーフを堰堤壁面に飾り、その除幕式が行われました。レリーフには、デ・レーケの木曾川上流山地調査に同行した佐田正一内務六等属の出張日記の文章が刻み込まれています。

滑川砂防公園は現在も着々と整備が進み、素晴らしい景観の自然公園が誕生することでしょう。また公園の周辺にはオートキャンプ場も整備され、夏になるとキャンプを楽しむ多くの人々で賑わいをみせています。



デ・レーケのレリーフ



参考文獻
『上松町誌』 歴史編 民俗編
平成一八年 上松町

赤沢自然休養林の成り立ちと現在

森林浴発祥の地、赤沢自然休養林



赤沢自然休養林

(一九八二)年に提唱され、同年秋に初の「全国森林浴大会」が赤沢自然休養林で開催されました。

現在「森林浴」という言葉は一般的に用いられますが、その発祥の地が赤沢自然休養林です。

赤沢美林の歩み

江戸時代、木曽一帯は尾張藩領となり、木曽の用材は、江戸城の大改修・名古屋城の造営などに利用され、山林は大々的に伐採されました。木曽の山林の荒廃を防ぐため、尾張藩は、寛文五年(一六六五)から山林の保護に乗り出します。現在の赤沢美林もこうした保護政策によって形成されたものです。したがって、赤沢美林はまったくの原生林ではなく、濫伐の後、尾張藩の厳しい林政の中から生み出された天然性人工林といえます。

明治時代になると木曽の山々の大部分は「御料林」と呼ばれる皇室の財産となり、赤沢の姫宮官林からは、皇居造営のための建築材が切り出



森林鉄道

され、明治十三年(一八八〇)の明治天皇行幸の折には、伏見宮貞愛親王が視察に遣わされました。

第二次世界大戦後、昭和十二年(一九四七)木曽御料林は国有林となりました。赤沢は、「材木遺伝資源保存林」「植物群落保護林」に指定され、こうした施策が赤沢美林を守り、日本で最初の「自然休養林」となりました。

「森林セラピー基地」に選定



森林鉄道のボールドウィン号

現在の赤沢美林は、溪流広場や森林資料館が点在する森林公園となっています。

園内には、木曽材の搬出に活躍した森林鉄道が休日や夏休みなどに走っています。木曽の林業の主力を担った森林鉄道は大正五年(一九一六)から昭和五〇(一九七五)年にかけて運行されていきました。そして、日本で最後の森林鉄道が姿を消してから一〇年を経た

昭和六〇(年)式

年遷宮に際し御用材運搬を行なったことをきっかけに運行を求める声が高まり、昭和六二年に乗車運行する運びと



赤沢自然休養林

なりました。当時の面影そのままの小型客車に揺られる往復およそ二・二kmは、森林浴の楽しみを倍増させます。

赤沢自然休

養林は、上松町の大切な資産です。縄文のころから脈々と育まれたヒノキの森、それとともに発展してきた林業の歴史、また、昭和五〇年代まで木曽の山中で活躍してきた森林鉄道の軌跡などを知る産業及び文化遺産ともいえます。この貴重な資料、森や自然の大切さを改めて教えてくれることでしょう。

また、澄んだ空気と爽やかな空気を浴びる森林浴をここでは体感することができます。樹木が発散する「フィトンチッド」は、心地よい安らぎの成分、殺菌物質を含む微妙な香りには、脳や心を静めるアロマセラピー効果があります。

平成一八年四月全国六ヶ所の一つとして「森林セラピー基地」に選定されました。

参考文献

- 『上松町誌 歴史編 民俗編』平成一八年 上松町
- 『木曽の上松わが郷土の文化と歴史』昭和四九年
- 『木曽の上松 編集委員会』平成一四年 上松町
- 『長野県の地名 平凡社』



昭和60年の御杣始祭の様子
<平成17年にも行われました>

気ままに
JOURNEY

長野県上松町

文人や歌人が愛した 中山道上松宿を歩く。

芭蕉が句を詠み、安藤広重が街道の風情を描く。中山道上松宿は、歌人や文人がこよなく愛したところ。翠緑の水をたたえる木曽川は、ヨーロッパ人登山家が絶賛した名勝。残照を浴びる木曽駒ヶ岳は、今も昔もかわることなく、旅人の心を感動で満たしてくれるところだろう。

昔の旅人の足跡を追いかけて

中央自動車道の中津川インターチェンジから、国道一九号を利用して北へ一路、国道に伴走するかのようには、木曽川が雄大な流れを見せています。この木曽川左岸は、木曽古道や中山道が走っ

中山道上松宿寢覚の越前屋と田瀬屋



ていたところ。平安時代の歌人は、木曽の風景を歌枕にして和歌を詠み、鎌倉時代になっても「寢覚」などを歌枕に、多くの和歌が詠まれたようです。江戸時代になると、貝原益軒や安藤広重、十返舎一九が木曽の風物を描いています。

旅といえば、今も昔もかわらず、名所旧跡を訪ね、名物を食べるのが楽しみです。そんな昔の旅人の足跡を追いかけるながら、上松の旅を満喫してみることになりましょう。

木曽八景・小野の滝を堪能

旅人にとって、峻険な山々が屹立する木曽一宿の風景は印象深いものだったでしょう。中山道の中でも木曽一宿だけは、木曽街道と呼ばれるようになりまし。

江戸時代になると中国の影響を受け、景勝地八景選定が各地で行われるようになり、木曽八景も選定されました。この八景の内、①駒ヶ岳の夕照②小野の瀑布③棧の朝霞④風越山の青嵐⑤寢覚の夜雨と、上松町からは五景も選定されています。木曽街道の中でも上松は人気スポットでした。

風景画に独自の境地を開いた安藤広重は、浮世絵師溪斎英泉との合屏で「木曽街道六九次」を完成させました。この画集は不朽のヒット作。上松では小野の滝を前に、旅人たちがキセルを手に



木曽八景・小野の瀑布

なにやら語り合っている風景を描いています。

約二〇mの落差で流れ落ちる小野の滝は、緑の山肌から白い布がはらりと落ちてくるような神々しさ。飛沫をあげる滝を前に旅人は足を止め、一服したくなったでしょう。

浦島太郎と寢覚の床

小野の滝を過ぎるともうそこは、絶景で名高い寢覚の床。

臨川寺は、寢覚の床を一望する古刹です。木曽七福神の一つ、弁財天を祀り、街道沿いの七つの古寺を結ぶ霊場にもなっています。

寺の境内には松尾芭蕉や正岡子規、尾張の詩人横井也右の句碑が残されていますが、これからも寢覚の床が、どれほど多くの歌人や文人に愛されたか

知ることができそうです。

寢覚の床は明治の早い時期から海外に紹介されており、日本アルプスの父と呼ばれるW・ウェストンを始め多くの外国人が訪れています。ドイツ人登山家のシュタイニッツァーは、「日本山岳紀行」の中で、「木曽川の荒波の真只中に、花崗岩がこつこつそびえている。(中略)これほど安らかで明鏡止水の心境になれるたすまいを、この国ではほかのどこへ行けば目にすることがのできるのであらう」と絶賛しています。

ヨーロッパ人を魅了した寢覚の床。ヨーロッパ人を魅了した寢覚の床。この不思議な名は、浦島太郎伝説に由来するものです。竜宮城から現世に戻った浦島太郎は、寢覚の床で玉手箱を



浦島堂

来するものです。竜宮城から現世に戻った浦島太郎は、寢覚の床で玉手箱を



臨川寺境内

上松町の歳時記

◆小川若宮神社例祭◆

例年4月下旬

上松町の島地区に伝わる例祭。伝統的な獅子狂言が、春爛漫の3日間にわたって行われます。狂言は地元の若連中による熱演です。独特の獅子狂言「葛の葉の舞」は母と娘の別れを描いたもので、獅子頭をかぶった女形が、筆をくわえて戸板に恨み詩を書き付ける県内でも非常に珍しいものです。

【開催場所】
上松町島地区。小川若宮神社境内での上演は最終日午後です。



◆駒ヶ岳神社例祭◆

例年5月3日開催

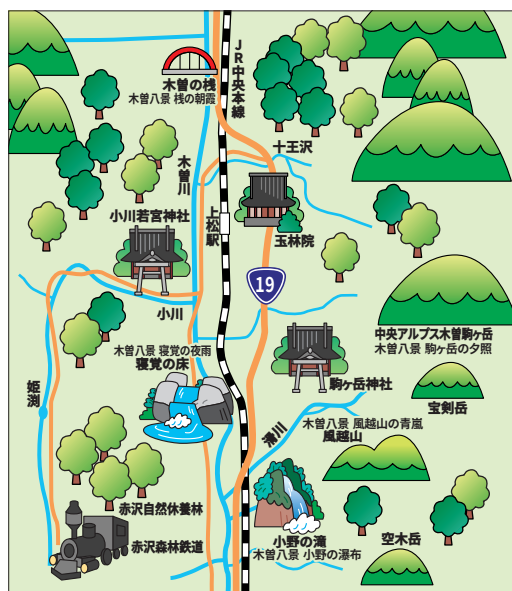
木曽駒ヶ岳頂上に奥院がある駒ヶ岳神社の例祭。国の選択無形民俗文化財指定された「太々神楽」を奉納します。13座の舞台で構成された太々神楽は、400年以上前から伝わる奉納の舞いで、地区の家々に一子相伝で伝えられており、門外不出とされています。舞台では、剣を手にした3人の舞手による「三剣の舞」や、4人の天狗が舞う「四神五返舞」の姿が有名で、迫力ある瞬間を見ようと毎年多くの観客・カメラマンで賑わっています。

【開催場所】上松町駒ヶ岳神社里宮



イベントカレンダー

- ・五社神社例祭 5月下旬
- ・大宮神社例祭 7月下旬
- ・鹿嶋神社例祭 7月下旬
- ・ひのきの里夏まつり 7月最終土曜日
- ・諏訪神社例祭（上松祭） 9月上旬
- ・神明神社例祭 10月中旬
- ・姫宮神社例祭 10月15日



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

小牧JCT 中央自動車道 (約60分) 中津川IC 国道19号 (約60分)

◆名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 JR中央本線 (約90分) 上松駅

●お問い合わせ●

◆上松町役場◆

〒399-5603 長野県木曽郡上松町駅前通り2-13
TEL 0264-52-2001 <http://www.town.agematsu.nagano.jp/>

中山道の難所 木曽の棧

開き、永い夢から目覚めて、たちまち三百歳の翁の姿になったというもの。そんな伝説を残すほど、幻想的な雰囲気漂っているのでしょうか。ここは国の史跡名勝天然記念物に指定され、平成一九年三月に「美しい日本の歴史的風土 準一〇〇選」に選定されました。

上松は「焼け松」と冷やかされるほど火災が多かったところ。元禄九年（一六九六）の全焼火災をはじめ、度々大火が発生しています。このため、上松宿も昔の面影をほとんど残してはいませんが、それでも、十返舎一九の「続膝栗毛」に紹介された旅籠や蕎麦茶屋が現存しています。「田瀬屋」は大名や姫君



現在の中山道上松宿

も立ち寄ったと言われ、ほどのそば処。また名物そば切りを出す越前屋は、旅人の話題にのぼるほどの名店で、十返舎一九は「続木曽街道膝栗毛」の中で「名物のそばきりよりも旅人はむすめに鼻毛をのぼしやらむ」と越前屋を紹介し、そばと美人の寝覚として一躍有名になったようです。喜多川歌麿も訪れ、島崎藤村も小説「夜明け前に紹介したといひます。この宿場町をそぞろ歩いたら、木曽の棧へ。ここは中山道随一の難所として名を馳せたところ。木曽川の絶壁に藤



大正前期の旧寝覚立場茶屋付近

残照に輝く木曽駒ヶ岳

づるで編んだ綱が渡されていました。棧やいのちをからむ葛かつら 松尾芭蕉 奇岩がごろごろと横たわる直下の木曾川は、さながら奈落の底。恐ろしさに慄く心を、芭蕉がこのような句に残したのでしょうか。しかし現在は、国道の下石積みには街道の面影をとどめるのみ。「木曾のかけはし、太田の渡し、碓氷峠がなくばよい」と語られたのも、今は昔の夢物語です。

駒ヶ岳の麓にある風越山は、草原を風が渡る風景が素晴らしい。「風越山の青嵐」として、木曾八景のひとつに数えられました。かつては牛馬の牧草地として使用され、麓から頂上まで青々とした草に覆われて風が波のように駆け上っていく風景が見られたようです。

木曾谷と伊那谷を分けて南北に走る「日本最大の花崗岩山脈」が、中央アルプスです。麓から眺める山並みは美しいものの山容は険しく、大山脈の例に違わず自然の穏やかさと厳しさが共存しています。 今や伊那谷からのロープウェイで高山の空気を簡単に味わうことが可能となりましたが、木曽側登山道は自然のままの風景や、登頂の征服感を維持しています。木曾八景のひとつに数えられている木曽駒の夕照は、木曾谷の各所から楽しむことができます。 残照に輝く白雪をいただいた山々、木曾八景一と称される光景は今も昔も、旅人の心を捉えてはなしません。



木曾八景・駒ヶ岳の夕照

明治改修

第二編

デ・レーケの木曽三川調査と

「木曽川下流概説書」

デ・レーケは木曽三川下流改修のための現地調査を明治十一年（一八七八）二月から三月にかけて行いました。三川を精力的に調査したデ・レーケはその調査結果を「木曽川下流概説書」としてまとめ上申しています。

木曽川調査の開始

デ・レーケの木曽川流域への到着が間近になった明治十一年、一月三十一日付けの愛知新聞は「木曽川水利のことに付て県令にも屢々五出張にて三重・岐阜、両県令と五集会あるは……「ケレップ」を今度木曽川へも設けられるに付

てのことにて……近々中村内務少書記官も出張になり又当時大坂府へ出張の土木局雇工手蘭人ウィ氏も同府より参られると聞きましたと報道しています。

また、二月には、内務省土木局出張所が岐阜県羽栗郡八神村（岐阜県羽島市桑原町八神）に開設されました。

当時の内務省の組織としては「出張

ていました。

山崎六等属は、明治十九年六月に正式な組織として木曽川出張所が設置されるまでは、土木局出張所の責任者でした。笹川八等属は、当初は瀬戸の砂防に従事していましたが、出張所の業務が拡大されたため河川工事を担当するようになりました。内田恭雄内務八等属は、土木寮大坂分局に派遣されてデ・レーケの指導の下に調査や工事に携わっていた人ですから、ケレップ水制の施工にも堪能であったと思われます。

エッセルとデ・レーケの木曽川出張

二月上旬には、デ・レーケやエッセルが木曽川に出張してきました。彼等が何時、何処に到着したのか明らかにする記録は発見されていませんが、二月一二日の愛知新聞は「内務少書記官中村君には木曽川水利の見分として出張になることは兼て当新聞にも記せしが四五日以前津島村へお着にて……また「木曽川筋に」ケレップを設けらるるに

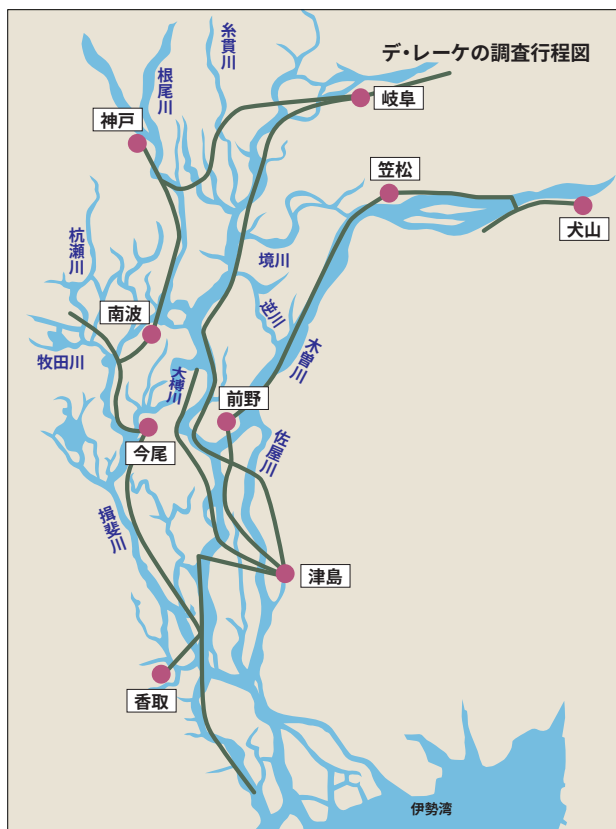
付不日洋人が見分として出張になる云々と有ましたが其掛りと見え兩三日前海東郡津島村へ五名の洋人が到着……と報道しています。

エッセルは、回想録に木曽川調査のことを「尾張を訪問し、河川の流出量に関する調査を行い、我々とともに一時滞在していたデ・レーケは……と記しています。

また、デ・レーケも、この時の調査報告書である『木曽川下流概説』の冒頭に「本年二月上旬ニ於テ尾張灣ニ流出スル川河ノ流域ニ着シ」と記していますから二月一二日付の新聞記事の洋人は、エッセルとデ・レーケである可能性が極めて大きいと言えます。

しかし、エッセルは、東京で二月二三日の地震を体験していますから、デ・レーケと一緒に過ごしたのは一週間程度と思われる。

エッセルが帰京したのち、デ・レーケは何処で何をしていたのでしょうか、瀬戸や庄内川筋の愛知県内を視察してい



所は存在していませんから、「土木局出張所」の名称は正式名称ではなく通称です。この出張所に派遣された全ての人の名は明確ではありませんが、愛知県に保存されている文書などによると、山崎潔水内務六等属、笹川義潔内務八等属、内田恭雄内務八等属が出張扱いで赴任し

た可能性がありますが、現在も不明のままです。

デ・レーケの調査行程



犬山城から上流を望む



犬山城から下流を望む

二月三日、デ・レーケは、中村孝禧内務少書記官や愛知・岐阜・三重の三県の職員とともに犬山城の天守閣に姿を現しました。

望遠鏡で流域山地を観察

して、禿山による影響と対策を指示。次いで木津用水を視察して、取水の方法について意見を述べています。このことは、第二次大戦中に供出された銅製の木津用水改修之碑に「蓋激川水以其力浚疎水路之法也時多非議之者如蘭人某氏亦不可」と刻まれていました。

二月二四日

は、木曾川が三つに分れる鹿ノ



明治時代の木津用水

子島付近の河道を視察し、草井の渡しで木曾川を渡り笠松まで調査しました。翌二五日は、一宮市東加賀野井付近まで調査して、再び笠松に帰っています。この付近は、天正一四年（一五八六）の大洪水によって、加賀野井村が分断されて、現在の木曾川の河道が出来たところです。このため、木曾川の両岸に加賀野井の地名が残っています。

二月二六日は、笠松から羽島市桑原町前野まで調査しました。場所によっては船に乗って調査し土砂の流れを観察しています。デ・レーケはこの模様を「河水悉く細少ナル砂ニテ終始流動ス水中ニ之ヲ見ルニ恰モ雲ノ如シ」と表現しています。

二月二七日は、神明津輪中（稲沢市）を調査して



明治初期の前野付近の河道

津島市まで至り、翌二八日は、立田輪中（愛西市）や油島締切を経て、桑名市多度町香取まで調査しています。

三月一日からは損斐川筋の調査が始まりました。香取から今尾（海津市平田町）までを調査しました。この区間には、盤岩谷・山崎谷・羽根谷など多くの深流が損斐川に土砂を流し込んでいます。デ・レーケは「損斐川ノ下流ニ出ル若干ノ山河アリ、之ヨリシテ礫ヲ損斐川ニ流出シ、之ガ為ニ大ニ河中ヲ狭メ」と記

しています。

三月二日

は、大樽川を調査して、損斐川を遡り、牧田川を上流まで調査して、大垣輪中水門から福東（輪



デ・レーケの視察状況

之内町）を経て南波村輪中（内町）まで調査。三日は、神戸町までの損斐川筋を調査。四日には糸貫川など長良川右支川を調査して岐阜に泊まりました。翌日の五日は、岐阜を拠点に、長良川上流の古津まで調査しています。

三月六日には岐阜から長良川筋を調査して津島に至りました。七日は、津島を拠点に勝賀周辺（海津市平田町）を調査しています。

この模様を当時の新聞は「本月五日より内務省より派出の官員は外国人と共に長良川筋を検査になるので当県岐阜県の官員も随行にて右川沿いの村々を廻られ去る七日には美濃海西郡勝賀村上迄巡検済み八日は右勝賀村はじめ見分になるとして沿川村々は堤上へ幕を打廻らせ村吏が案内の為出張て居ると見て来た人の話」と報道しています。

「木曾川下流概説書の上申

デ・レーケは三月八日に調査の全行程を終えて大阪へ帰り、調査結果を「木

曾川下流概説書」としてとりまとめ、四月六日に石井省一郎土木局長へ上申しました。

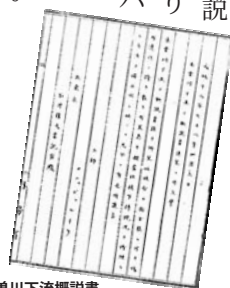
デ・レーケがオランダ語で書いたと思われる原文は、現在のところ発見されていなくて、和訳書のコピーのみが残されています。

上申書には、「木曾川下流の概説書謹て拝呈仕候、右は検分致す可き場所遠近に跨り数ヶ所差急ぎ検査仕候、乍併現況を修理する方法を確示致候には充分に有之候、謹言」と範囲が広いため、緊急を要する数ヶ所の調査であるが、当面の工事場所としては充分であろうと書いています。

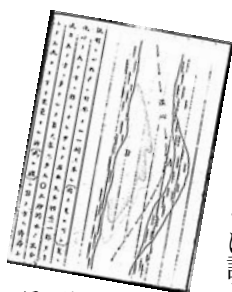
また「水害ノ原因及来歴ヲ詳ニシテ、且如何ノ手段ヲ以テ之ヲ修シ得ルヤヲ知ラン為、此ノ土地ノ全部ヲ縦横奔走セリ、此ノ事件ニ付テハ拙者ノ存慮現場ニ於テ、予メ中村君及三県ノ吏員ニ陳述セシト雖、主意ナル件々ヲ今亦爰ニ再述セン」と冒頭に述べているように「木曾川下流概説書」は、細部については、同行した中村孝禧内務少書記官や三県職員に話してあるので、要点のみを述べるとしていますが、日本語に翻訳して約九千字に及ぶ長文です。その内容は、大別すると

一、水害之原因

一、現況ヲ修スル手段（改修の方



木曾川下流概説書



概説書に記載された図面

法・木曽川の分離
一、各河川ノ節度(対策)
一、必要ナル測量(調査)
によって構成されています。

水害の原

因については、山地からの流出土砂による河床堆積が原因であるとして、また、油島締切のよ



油島締切地点の現況

うな分水施設は、土砂の含有度が低い表面の河川水を分流しているため、土砂濃度の高い河川水が木曽川に残り、このため土砂が木曽川の河道に停滞して、河床堆積を増大させていると説いています。また、溪流からの土砂流出や河岸の崩壊も河床上昇の原因の一つであるとして、図面を添えてその模様を解説しています。

改修の方法については、この木曽川は、たいへん幸せなことに改修する方法がある。ただし、科学的な方法により調査検討しなければならないと、次のように記しています。現在ノ水害

ヲ修メ且向來田地トナルベキ土地ヲ興ス為如何ノ方法ヲ以テ為シ得ル哉ハ迅速拙者ニ明瞭セリ、爰ニ施スベ

キ手段アルハ
実ニ大幸ト
言フヘシ(学
術ニ拠ラズン
バ為シ難タ
シ)。

木曽川の

分離については、「此ノ分水工ハ佐屋川ノ上口ニ始マリ、砂洲ニ築ケル粗朶工ノ導水堤ヲ以テ海面ニ終ル」のように、立田輪中の左側(東側)を立田輪中の下流端まで開削して、新たな木曽川の河道とし、現在の木曽川河道は長良川専用の河道すると提案しています。

ただし、立田輪中の下流において長良川および揖斐川をどのように分離するかは、今後調査の上決定するとしています。

そうして、このような木曽川の分離によって、長良川および揖斐川の水面は著しく低下し、各輪中の悪水排除が容易になるが、この効果を永続させるためには、各河川流域の防護(砂防)を怠ってはならないと説いています。

次に、木曽川の対策では、山地より流出する土砂量を減少させる工事に着手すべきとして、施工の順序は山地の砂防を先行し、その後に本川の改修を行うものとしています。

木曽川の修築工事

木曽川の修築工事は、デ・レーケの調査と併行して行われました。明治一



明治初期の立田輪中下流付近の河道

年四月一三日には、木曽川筋成戸村(岐阜県海津市)の粗朶工が開始されました。また、水源地では、庄内川水系矢田川上流の瀬戸市周辺の砂防工事が、同年三月から着工されています。当時の木曽川修築工事は、木曽川水系のみではなく、隣接する庄内川や員弁川も含めて実施されていました。

これらの工事のための資材の準備は、デ・レーケの現地調査の前から進められていました。岐阜県では、内務省土木寮の命を受けて、二月には、木曽川への粗朶工施工のための材料として、粗朶二十万束、帯梢七千本、杭木一万本を発注し、土木局出張所に斡旋しています。

また、愛知県においても同様に瀬戸の砂防工事のために資材の準備を行ったものと思われ、四月には約一千百円の粗朶代金が支払われています。

粗朶工の設置は、成戸村地先のほか、三柳村(羽島市)から成戸村(海津市)間、また各務郡前渡村(各務原市)などでも施工されました。また、一年の年末には、揖斐川筋の安八郡塩喰村(輪之内町)・平村(大垣市)・右津郡東駒野村外新田・安田村(海津市)などでも粗朶工が施工されるようになりました。

一方では、このようにして多くの場所で施工された粗朶工が、漁業や舟運によつて破壊される事例が多発してきたため、明治十二年五月一三日内務省は、愛知・三重・長野・岐阜の四県に対して、

木曽・揖斐・長良の三川流域に施工中の粗朶工を損傷しないように川沿いの村々に厳達させました。

木曽三川改修にむけて

デ・レーケは、明治二十三年二月に親友のエッセルに宛てた手紙に次のように書いています。

「木曽川の河川改修を考慮して幾つかの書籍を送つて下さい。私の昨年の報告書のコピーが貴方の手元にあると思います。そこに書いてある内水排除問題と河床上昇問題、河口改修(導流堤兼防波堤の機能)に参考となるようなもの、また、山地の保水と再生のために植林するという大問題についても忘れないで下さい。」

木曽川改修計画の原典として評価されている「木曽川下流概説」もデ・レーケにとつては、未完成な報告書であり解決しなければならぬ課題が多かったのでしょうか。こうしたデ・レーケの努力によつても、現在の木曽三川改修計画として実現するためには、まだ、数年の年月が必要でした。

参考文献

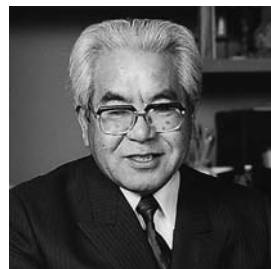
- 『岐阜県治水史』 岐阜県 昭和二八年
- 『愛知県公文書』 明治一二年
- 『蘭人工師エッセル日本回想録』 三國町 一九九〇年
- 『愛知新聞』 明治一二年
- 『治水の愛知縣十年』 黒川耕作者 昭和二十七年
- 『デ・レーケの書簡集』 宋定稿 上林好之著 平成一二年



治水共同社と

明治官僚の気概

片野記念館館長 片野知二氏



片野知二氏

昭和2年生。岐阜師範特設研究科終了後、34年間教職に就く。うち18年間障害児学級を担当。昭和46年に輪中民俗資料を展示した片野記念館を開設。現在は神職、県神社庁安八郡支部事務長、県精神薄弱児相談員、輪之内町文化財審議委員、県博物館協会常任理事。

(著書) ふるさと輪之内、輪中文化の会機関紙、加毛神社誌、白山比咩神社誌、写真でみるふるさと (共著) 輪之内町史、岐阜県の地名、わのうち百話郷土の輝く先人 (上・下巻)、開けゆく輪之内

はじめに

川柳に「袖の下たびかさなりてほころびる」という句がある。昨今の新聞やテレビニュースに報道される政治家や官僚の不正を咎め風刺した句だと思うが。

ここでは、古い語だが明治の木曾三川改修工事着工に至る経緯と地域住民と明治官僚の品格について書くことにする。

明治改修施行に至る経緯

①明治元年一月笠松県知事長谷部恕「美濃国治水建策」を刊行する。

②明治四年岐阜・愛知両県の関係輪中堤防取締役の者より新政府土木司に対し、木曾川分流工事の施工方が提出される。

③明治五年政府はオランダ人技師を招き治水調査の実施を決定する。

④明治六年二月本巢郡十八条村医師



美濃国治水建策

林俊篤は木曾川治水に関し、底抜州浚法を岐阜県知事小崎利準に建言した。さらに同年六月安八郡土倉村浄雲寺住職高橋示証は三大川の幅員を拡張し、かつ河口まで分流するという改修方を提出した。引続き高橋示証は明治八年三月後任住職詮証を代理とし八人の同志と相謀って再び治水に関し元老院へ建言した。

⑤明治十二年一月安八、石津、海西、多芸、大野、本巢、厚見、羽栗、中島、不破方県郡の有力者は、安八郡五反郷村片野万右衛門の長男龍蔵を中心として二八名が

連署して「美濃国水利改修懇願書」を提出し、さらに「水利改修二付地図凡例」という各輪中の河川改修の意見を地図にまとめ同年十二月二十五日までに提出を申合せ新政府の木曾川改修工事計画の進捗に対応し改修について地域の世論をまとめた地元の有志者は、「治水改修有志社」を結成し河川改修の実現を期することにした。

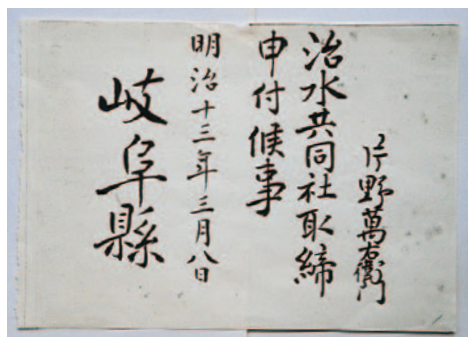
⑥明治十一年以降、官民両面からの要望に依って木曾三川水系の調査をオランダ人水利工師ヨハネス・デ・レーケによって進められた結果、デ・レーケは明治十三年四月三川分流せしむべきの意見書を政府に提出した。

⑦明治十三年二月「治水改修有志社」を改組し「治水共同社」と改め、木曾川水系改修工事の促進に民間有志者の活躍は一段と活発化した。同年三月八日安八郡片野万右衛門は治水共同社取締となる。



万右衛門の肖像

この写真は、上林好之氏がオランダのエッセル家を取材した折、発見されたもの。デ・レーケがエッセルに送った写真で、明治14年8月13日71才と記されている。



万右衛門取締役申付

⑧明治一五年七月、西濃一・二郡各輪中組合総代山田省三郎外四名は

治水事業工費が同一三年以降県費負担となったにつき「水害の頻発を免れ得ない本県では、負担に耐えられぬので国費負担に復されたい」と陳情に及ぶなど治水共同社は終始一貫して政府に工事の促進をはかるよう東奔西走の努力を続けた。

⑨明治二六年一月治水共同社は「全国治水同盟会」結成に参加し以来全国太河川の改修について共同戦線を組織しその目的達成に努力した。

明治官僚の品格

岐阜県史に次の一文が綴られている。

「このような民間有志の活動に対しては、新政府の関係者も好意を以



治水共同社関係文書

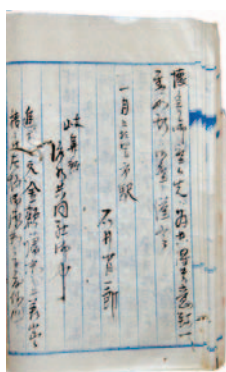
て接したが特に直接担当者であった内務省土木局長石井省一郎は「治水共同社」が木曾三川改修工事に協力的であるのに感激し、金五十円を寄付してその活躍を激励した」と綴っている。

この一文にあるように明治官僚の身銭をきる義侠心もさることながら、感心させられるのは石井省一郎初代土木局長の投じたこの一石が、岐阜県の土木事業に関係する役人の手本となり治水共同社へ続々と寄付金が寄せられるに至るのである。

手元にある「治水共同社関係文書」

に綴られた関係資料を紹介することにする。

①土木局長石井省一郎寄付金書状



寸楮致「拜呈」候陳者先般御地へ罷出候者各位御一同拜願を得加之木曾川改修一条に付御心事の程遂一了知致し満悦此事に御座候右に付聊が微意を表せんが為不「顧」鎖少へ些少「金五十円也貴社へ相納候間何卒御收納之上雑費之内へなり共御加入被成下候得者拙者も本懐の至りに御座候先は為「其得」貴意「度」一書如斯に御座候謹言

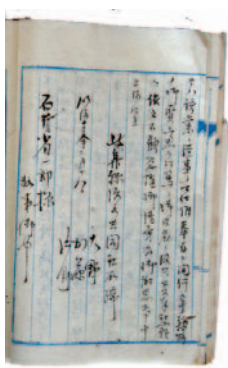
一月五日 於四日市駅

石井省一郎

岐阜県治水共同社御中

追て本文金額は帰京之上差出候に付左様御承知被「下度候也

②寄付金に対し治水共同社取締から礼状



本県下の巨害たる木曾川改修の儀被害村民

挙テ切望懇願可仕二際シ幸閣下本県諸川源御実候ノ二遭遇シ親シク拜謁ヲ仕不「憚」意緯ノ衷情陳述仕候処県下積年水害ノ実情御

諒察ヲ蒙リ願意速ニ御嘉納ニ相成将来改候ノ順序云々ノ恩諭ヲ蒙リ加之當社費途ノ内へ加入可致ノ御特旨ヲ以テ金五拾円也御仁投被「成下」候条社員一同感欣雀躍無限海岳ノ荷恩口紙ニ候精口仕合就テハ該業「従事可仕候奉」存ノ間何卒殊特ノ御賢慮ヲ以篤ク御保庇ノ段只管奉「懇願」候依「之不」顧「恐懼」御請旁右御謝恩奉「申上候以上

岐阜県治水共同社取締

明治十三年二月一八日

大野 加藤 片野

石井省一郎様

執事御中

③県土木掛四等属 木村直量外二一名

治水共同社へ寄附金書状

今般各位御協力治水共同社御創立の事は濃国固有の患者を除却し幸福の永久に開くの洪図にして実に千載一遇の美挙に感佩不堪是仍て直量等聊か美意を表せんが為別記の金員到「贈進」候条御社金中へ御加入被「下候はば大幸不「過」之候右得「貴意」度如「此候草々不備

明治十三年二月二十日

木村直量
小川高好
西村元長
千田惟安



治水共同社御中

記

一金二十円 木村直量
 一金十円 小川高好
 一金八円 西村元長
 一金七円 千田惟安
 一金五円 那須重次郎
 一金五円 山田正弘
 一金五円 工富敷高
 一金三円 伊藤三郎
 一金三円 鈴木精一
 一金三円 小川政敬
 一金三円 松野眩
 一金三円 松原暉邑
 一金二円 園部秀知
 一金二円 木村保

那須重次郎
 山田正弘
 工富敷高
 伊藤三郎
 鈴木精一
 小川政敬
 松野眩
 松原暉邑
 園部秀知
 木村保

④羽栗・中島郡長国井清廉寄附金書状

記

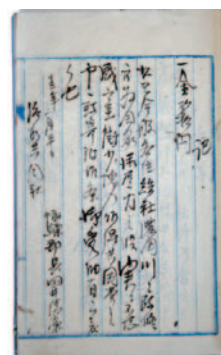
一金二十円

右者今般各位結社濃国川々改修方為「国家」御尽力の段実不

堪「感」至「微少愧入候得共社費之中に到「寄附」候条御受納有之度候也

十三年二月二十日

羽栗中島郡長国井清廉
治水共同社御中



⑤知事小崎利準治水共同社役員を招き慰労の宴を催す治水共同社取締知事招宴に対する謝辞

夫れ水害の惨酷たるや実に大にして、豫め之が防禦をなさざる可らざるは各人皆之を知る。然りと雖とも其業の大にして而して能く一郡一村の以て功を成し得べきに非されば、遂に数百年の久しき其術を講ずるも其功を大成する能はざりき、茲に小三郎、万右衛門等本州水利の改修を謀らんと有志者を團結し治水共同社を与し、之が事業を官庁に懇請す。此時に当たりてや県令閣下は大ひに之を嘉みし上は大政府に何て人民の表情を貫通せしめ、下は社員をしめ益其業を力めん事を奨励し、加ふるに本日をばくし社員を招集して懇親の盛宴を辱ふ。嗚呼幸ひなる哉時

加藤小三郎
 片野万右衛門
 ヨハネス・デ・レーケは今より一三四年前の明治六年三〇才のとき来日し、爾来三〇年間日本に滞在、主に木曾三川改修事業に従事し明治三六年日本を離れた。オランダ人で我が国に近代治水工法を伝授してくれた功労者である。
 ここでは木曾三川分流工事の折、ヨハネス・デ・レーケ招聘時の経緯を抄出したが、祖先が積年にわたり水害排除にかけた執念には敬服のほかない。当時八十有余を数えた大小輪中が互いの利害得失を度外視して大同団結し治水共同社という民間の



万右衛門の碑

期の此に及ぶ社員等不肖と雖ども奮て此事情に勉勵し、誓て此事業を竣功し豈閣下愛民の洪恩に酬はざる可けんや。因て衆員に代りて聊が鄙辞ヲ述へ謹而謝意ヲ表スト爾云
 明治一三年三月十日

加藤小三郎
片野万右衛門

むすび

ヨハネス・デ・レーケは今より一三四年前の明治六年三〇才のとき来日し、爾来三〇年間日本に滞在、主に木曾三川改修事業に従事し明治三六年日本を離れた。オランダ人で我が国に近代治水工法を伝授してくれた功労者である。
 ここでは木曾三川分流工事の折、ヨハネス・デ・レーケ招聘時の経緯を抄出したが、祖先が積年にわたり水害排除にかけた執念には敬服のほかない。当時八十有余を数えた大小輪中が互いの利害得失を度外視して大同団結し治水共同社という民間の

治水団体を組織した快挙はすばらしい。就中その基金は記録によれば所有地一町歩につき七円から一〇円の出資金をもつて三川分流工事の促進をはかったのである。また、河川行政の当時の国の行政官僚であった初代土木局長石井省一郎の五〇円の寄附行為がきっかけになって、続々と治水共同社に寄附金が寄せられたという。遂には県知事小崎利準が治水共同社役員を宴席に招いている。
 こうした心配りこそ官民一体の民主政治の原点ではなからうか。



木曾川改修縮図(片野記念館蔵)

■参考文献・注
 『岐阜県治水史』
 編修 伊藤安男 福井県三河町刊
 『ヨハネス・デ・レーケ書簡集』
 翻訳 上林好之
 『デ・レーケとその業績』
 建設省(現国土交通省)中部地方建設局
 木曾川下流工事事務所刊

民話の小箱

小川入の姫溺悲話

源氏と平家の争っていた、源平の時代のお話です。里では田植がはじまった初夏のこと。

京都から、美しいお姫さまが逃れてきました。

幼いころ別れ別れになった弟が、

木曾の山中にかくれ、生活していることを聞き、

追手をかわしながら、

小川の里までたどりついたのでした。

しかし追手は執拗に追いかけてきます。

親切な村人の厚意で麻畑へかくれ、

追手をやり過ごすことができましたが、

またいつ追手が引き返してくるともかぎりません。

お姫さまは村人にお礼を言い、

疲れた足を引きずるように、

山の奥へ奥へと踏み分けていくと、

大きな淵があらわれました。

数日來の雨で川は増水し、淵はまさにあふれんばかりです。

お姫さまは川を越すことができません、

岩の上で一休みしました。

そのときふと、

逃げる途中で見た美しい田園風景を思い出し、

美しい声で田植歌を歌いながら、

田植えの真似を始めました。

追手を忘れた幸せな時間でした。

一方追手は、お姫さまがあわててこぼれていた匂い袋の、

じゃ香が点々とこぼれているのをかぎつけて、

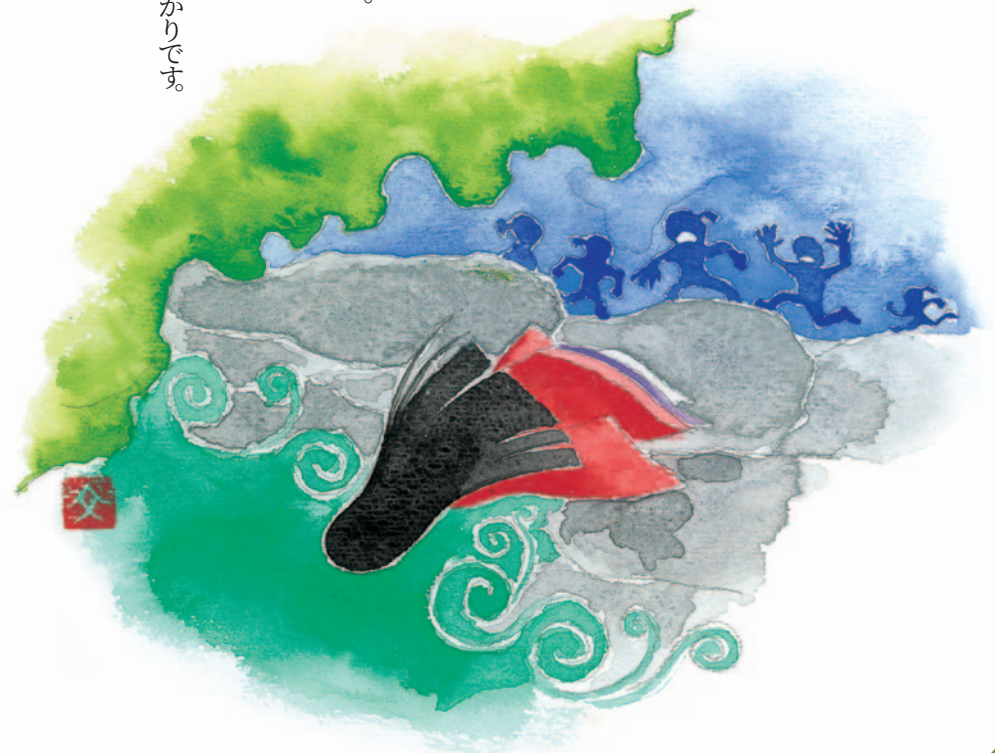
岩の上で唄うお姫さまを見つけてしまいました。

「いたぞ」「姫がいたぞ！」

口々に叫ぶと、わつと襲ってきました。

もうどうすることもできません。

お姫さまは会えなかった弟の名を呼びながら、



増水した深い淵に身を投げました。

このことがあってから、お姫さまが亡くなった淵を、

姫溺と呼ぶようになりました。

村人たちは、お姫さまの霊をなぐさめるために、

淵のほとりに姫宮と呼ぶ小さな祠を建てました。

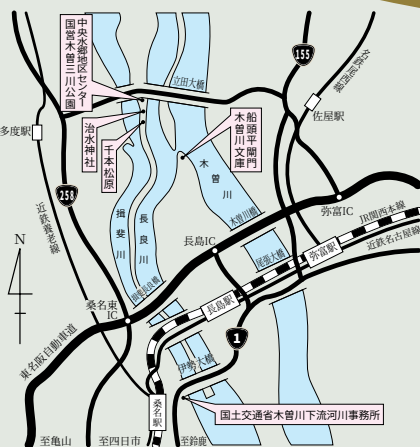
小川入のじゃ香沢は、

お姫さまが匂い袋を落としたところと伝えられ、

また、お姫さまが隠れた麻畑は、

麻が良く育つと言われています。

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・
木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL(0567)24-6233



●表紙写真● 上:寝覚の床 下左上:駒ヶ岳神社 下左下:赤沢自然休養林 下右:木曾八景・棧の朝霞

編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、長野県上松町の皆様及び、片野知二氏にご協力いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

次回は、岐阜県羽島市を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

『KISSO』Vol.62 平成19年4月発行

発行:国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島465 TEL (0594) 24-5715

木曾川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

編集:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL (052) 565-1976